

アイヒマンの悪における「陳腐さ」について¹⁾

香月 恵里

はじめに

第二次大戦終結後、密かにアルゼンチンに逃亡し、ブエノスアイレス郊外に暮らしていた旧ナチ戦犯アドルフ・アイヒマンは1960年5月11日、イスラエルの諜報機関モサドによって拘束された。1961年4月11日、エルサレムで裁判が始まると、ハンナ・アーレントは雑誌『ニューヨーカー』の援助を得てこの裁判を傍聴するためにエルサレムに向かった。この時の記録および各種の資料分析からなる「エルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告」(Eichmann in Jerusalem. A Report on the Banality of Evil)は1963年2月16日号に始まって5回に分けてこの雑誌に掲載され、同年5月に同じタイトルで単行本として出版された。²⁾ この本は多方面から激しい批判を浴びることになったが、その原因の一つは、副題の中の「陳腐さ」(banality, Banalität)という言葉であった。³⁾

人々には、この形容詞はアイヒマンの犯罪を過小に評価し彼の罪を減ずるものと思えた。また、ホロコーストの生き残りや家族を虐殺された人々は、自分たちが味わわれた筆舌に尽くしがたい過酷な経験を「陳腐なもの」として片づけられたと感じて憤った。この副題はアーレントの本来の意図を超え、後の世代の人間がアイヒマンに抱くイメージに決定的な影響を与えることになった。本論では、アーレント以後の史料も参考にしつつ、アイヒマン

- 1) 本論は、「ゲルマニスティネンの会関西支部研究会」(2016年2月20日、関西学院大学梅田キャンパス)において口頭発表した内容を大幅に加筆・訂正したものである。
- 2) Hannah Arendt: Eichmann in Jerusalem. A Report on the Banality of Evil. (Penguin Books) 2006. ドイツ語訳は Eichmann in Jerusalem. Ein Bericht von der Banalität des Bösen. München (Piper) 1964. 邦訳:(大久保和郎訳)『イエルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告』(みすず書房)2013年。この書からの引用は原則として英語訳を元に行い、邦訳を参照するが、一部訳語を変更した。
- 3) アーレントが激しいバッシングを受けた最も大きな原因は、ユダヤ人強制移送に当たり、ユダヤ人評議会が深く関与していたことを指摘したことにある。執筆にあたり彼女が参照したのは、Raul Hilberg: The destruction of the European Jews. Yale University Press, 1961. 邦訳:(望田幸男・原田一美・井上茂子訳)『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(柏書房), 1997年であり、この事実はヒルバーグもすでに指摘している。アーレントに対するこの点での批判は不当なものであったという評価が今日では定着している。

は「陳腐」な人間だったのか、そして「陳腐」という表現でアーレントは何を意味していたのか考えてみたい。

1. 「命令受領者」アイヒマン

1960年5月25日、イスラエルのクネセト（国会）でベン＝グリオン首相は、「アルゼンチンに潜伏していたアイヒマンを拘束した。エルサレムで裁判を行う」と発表し、世界を驚かせた。ニュルンベルク裁判中の証言により、アイヒマンが第二次大戦中に行われたユダヤ人強制移送と大量虐殺に責任ある人物であることはすでに知られており、多くの人々はアイヒマンを悪鬼のごとく陰惨な人間として思い描いていた。それだけに、実際のアイヒマンを見た人々は、彼の犯罪の途方もなさとその風貌との落差に驚き、あるいは落胆した。登場したのは、神経質そうな、典型的な小役人の外見を持つ、さえない初老の男だったからである。

イスラエルの検事長ギデオンのハウスナーは、ナチ犯罪者に対し当時一般的だった判断を援用し、アイヒマンを生れながらの犯罪者、「人間として生まれながら、野獣のように生きた」⁴⁾人間として断罪しようとするが、彼の言葉はそれが向けられている当のアイヒマンにはなんとも不似合いである。ユダヤ人担当官（Judenreferent）としてユダヤ人を強制移送し最終的には肉体的抹殺を命じた責任について追及されるたびにこの男は、自分は上司の命令に従っただけであり、忠誠と服従の誓いに拘束されていた、告訴の意味においては無罪だと判で押したように繰り返した。アーレントはこの男を怪物ならぬ「道化」（clown, Hanswurst）だと断定した。

アイヒマンは権威に服従した役人に過ぎず、ナチという抹殺機構の中の歯車に過ぎなかったといういわゆる「歯車理論」は、アーレントも否定し、アイヒマン自身さえ口にしたことがなかったのに、『エルサレムのアイヒマン』以降、各方面に大きな影響を与えることになった。⁵⁾ 裁判を傍聴した作家の

4) 『スペシャリスト―自覚なき殺戮者』（原題 Un spécialiste）エイアル・シヴァン監督、ロニー・ブローマン、エイアル・シヴァン脚本、1999年、Blu-ray Disc（マーメイドフィルム）より。

5) その最も顕著な例は、心理学者ミルグラムが1950年から1963年にかけて行った実験である。権威に命じられれば、人間は何の恨みもない相手に高圧の電気ショックを与えるという結論を出し、人間の服従性を証明したといわれるこの実験は「アイヒマン実験」と呼ばれている。また、アイヒマンを素材にした映画は数多いが、注4に挙げた『スペシャリスト』は、アイヒマン裁判の映像350時間分から「アーレントの本をロードマップとして」編集したものである。この映画に合わせて監督のシヴァンと脚本担当のブローマンが出版した本のタイトルは Eloge de la désobéissance（不服従への賛辞）という。邦訳：（高橋哲哉・堀潤之訳）『不服従を讃えて』（産業図書）2000年。

ハリー・ムリシュは、「もしアイヒマンの上司がシュヴァイツァーだったら、病気の黒人を病院に運べという命令を忠実に果たしただろう」と述べたといわれている。⁶⁾

2. もう一つのアイヒマン像

『エルサレムのアイヒマン』により、単に従順であったゆえに犯罪に加担することになった小役人アイヒマンというイメージが一般に流布することとなった。アイヒマン裁判の映像をアーレントの意図に沿って編集したフランス映画『スペシャリスト』が伝えるアイヒマンはまさにこのイメージどおりの男である。二つの眼鏡を使い分け、手に持った方の眼鏡を布でせかせかと磨き上げ、それを持ち上げてはしげしげと眺め、次に神経質そうに机の上の埃を吹き払う。その姿は滑稽でもあり、どこか哀れささえ感じさせる。しかし、こうした映像を見ていると、几帳面な官僚アイヒマンというイメージにあまりにもぴったりであるゆえに、もしかしたらこれは芝居なのではないだろうかという疑問まで浮かんでくる。

最初にこうした疑問を抱いたのは、裁判に先立ってアイヒマンの尋問を担当したイスラエルの警察官アヴナー・レス大尉（1916-1987）であった。レスによる尋問は275時間以上におよび、それを記録した調査は3564ページもの長さ達した。初めてアイヒマンに対峙した時レスの受けた印象も、おおかたの人間のものと同じであった。1960年5月29日のメモにレスは書いている。「この男は実際、幻滅であった。私は全く別のことを予想していた。（中略）私は悪魔に向かい合うことを予期していたのだが、今や、アイヒマンは角も曲がった足も持っていないことを確信せざるを得なかった。路上で彼と出会ったら、全く注意も払わなかったことだろう。大衆の中に埋もれてしまったことだろう。」⁷⁾レスの前でアイヒマンは、自分がSD（親衛隊情報部）に入局したのは単なる勘違いからだったと語り、自分がやや魯鈍かつ無害な人間であることを印象付けようとする。6月3日の尋問で、アイヒマンは自分がいかに卑小な存在であったかを強調して、次のように語る。「1935年から1945年までの出来事について、この10年のどの時点でも私に計画上の、原則上の、決定的なことが任されていたことはありませんでした。そのためには私は任務の位階からいっても部署からいってもあまりに低い地位にいまし

-
- 6) Markus Leniger: Antisemit und Bürokraten. In: Von Ödipus zu Eichmann. Kulturanthropologische Voraussetzungen von Gewalt. Hg. Dietmar Regensburger/ Christian Wessely. Marburg (Schüren) 2015, S.135.
- 7) Avner Werner Less: Lüge! Alles Lüge! Aufzeichnung des Eichmann-Verhörers. Rekonstruiert von Bettina Stangneth. Zürich-Hamburg (Arche) 2012, S.114.

た。それにもかかわらず私は、無実の中で手を洗うことはできないとわかっています。私が徹底して命令受領者 (ein absoluter Befehlsempfänger) でしかなかったことは、今日ではもはや意味がないと知っているからです。」⁸⁾

しかしレスにはかなり早くから、アイヒマンはそれほど単純 (naiv)⁹⁾ な人間なのだろうかという疑問が芽生えている。その後アイヒマンの尋問を続けるうちにレスの疑念は確信に変わってくる。1960年6月16日、レスは日記に次のように書いている。「彼を第三帝国の気味悪い存在に押し上げたものとは、その盲目的服従ではない。ここにいるのは、どんな方法であれ、どんな手段を使ってでも出世するという考えにとりつかれた人間である。」¹⁰⁾ 結局レスは、アイヒマンが今も確信したナチだと結論する。

1906年、ゾーリングゲンで厳格なプロテスタントの両親のもとに長男として生まれたカール・アドルフ・アイヒマンは、1914年、父の転勤に伴いオーストリアのリンツに転居した。ここでヒトラーも通ったフランツ・ヨーゼフ皇帝国立上級実科学校に入るが、その後、学業不振のため、職業教育を行う電気・機械・建築上級専門学校に通わされる。ここでもアイヒマンはあまり熱意を見せず、4学期の後に学業を放棄し、その後教育機関に通うことはなかった。アーレントは、アイヒマンの幼少期、青年期が「不運続き」¹¹⁾ であったと判断しているがこれには異論もある。鉱山会社で3ヶ月働いた後、アイヒマンはヴァキューム石油会社に就職し、ここで大いに活躍するのだ。アイヒマンの伝記を書いたデイヴィッド・セサラニによれば、アイヒマンは「学校であれ会社であれ、もっぱら机に縛られている時には無関心な態度を示すが、実際の活動や、彼のエネルギーの発露手段が多く存在する時には生き生きとする」¹²⁾ タイプの人間である。

ニュルンベルグ裁判における証言でその名前が取り沙汰されるまで、自分は無名の存在であったとアイヒマン自身は述べており、一般にもそう思われてきた。しかし、「エルサレム以前」のアイヒマンに興味を抱き、広範な資料を渉獵した哲学者ベッティーナ・シュタングネットは、アイヒマンの名はすでに1936年頃からユダヤ人の間で広く知られていたことを突きとめている。1932年にSSに入ったアイヒマンの出世は1938年、ウィーンに新設された「ユダヤ人移住中央局」の所長に就任したことにより決定的になった。1939年に

8) Ebd., S.124.

9) Ebd., S.115.

10) Ebd., S.131.

11) Arendt: Eichmann in Jerusalem, p.28. 邦訳22頁。

12) David Cesarani: Eichmann. His life and crimes, London (Vintage Books) 2005, p.23.

はある亡命新聞の中で「ユダヤ人の皇帝（ツァー）」とさえ呼ばれている。¹³⁾ ユダヤ人をまず首都のゲッソーに集めて過酷な住環境に置き、移送に無理やり同意させ、その際ユダヤ人共同体の指導者たちに命じて移送するユダヤ人の名簿を提出させるという方式はアイヒマンの立案によるものである。その際、非常に不利なレートを使い、移送される人々の財産を巻き上げた。こうした功績によって彼は1939年12月末、「ウィーン方式」をベルリンでも実施すべく、ベルリンのRSHA（国家保安本部）に配属され、ユダヤ人問題を扱う部局の長となった。1942年のヴァンゼー会議でハイドリヒは遂にアイヒマンを「ユダヤ人問題の最終解決」を計るため、省を超えて尽力する際の正式な調整者という地位に就けたが、それは「このような狂気の沙汰としか言いようのない計画は、通常の官僚的習慣にあまり長くかかわり合わず、型にはまらない解決を計った経験を持つ人間を必要とする。（中略）つまり彼は組織化の才能を持つ人間、今まで一度も存在しなかったことを可能にする人間として認められていた¹⁴⁾」からであった。SDやRSHAにおけるアイヒマンは、単なる命令受領者というよりは、「企画力」と「創造性」に富む、型破りの役人として通っていたのである。

3. 「サッセン・インタビュー」

1946年にミュンヘンのアメリカ軍捕虜収容所から脱走し、北ドイツのリューネブルガー・ハイデに身を隠していたアイヒマンは、旧ナチ戦犯を援助する組織に助けられて1950年夏、アルゼンチンに到着した。そこでは、ナチに熱狂していたドイツ系アルゼンチン人エーバーハルト・フリッチが、デューラー出版なる会社を起し、この出版社はドイツから逃れてきた旧ナチの避難所兼会合場所となっていた。国際的に讃えられた英雄的飛行士ハンス＝ウルリヒ・ルーデルも、1948年6月にブエノスアイレスに到着するとすぐにフリッチの仲間となっている。ルーデルとフリッチはドイツから逃れてきた旧ナチを援助するための組織「戦友会」（Kameradenwerk）を組織し、南米を回って会員を集め、また来るべき国家社会主義革命のための宣伝に努めていた。彼らを中心とする「デューラー・サークル」の幸運は、1948年にオランダ出身の親衛隊付き従軍記者で作家志望のヴィレム・サッセンを知ったことにある。サッセンはナチ戦犯としてベルギーおよびオランダで有罪判決を受け、アルゼンチンに逃亡していた。フリッチ、ルーデル、サッセンは

13) Bettina Stangneth: Eichmann vor Jerusalem. Das unbehelligte Leben eines Massenmörders. Zürich-Hamburg (Arche) 2011, S.34f.

14) Ebd., S.54.

第三帝国の名誉を守り、最終的にはヨーロッパでナチの復活を企画するための結託した共同体を築くことになった。¹⁵⁾

当時、大戦中のユダヤ人虐殺についての資料はまだ少なかったが、1955年末に出版されたレオン・ポリャコフとヴィルヘルム・ヴルフの本『第三帝国とユダヤ人』は人々に大きな衝撃を与えることになった。そこにはユダヤ人からの強奪と迫害を認める総統命令、「ラインハルト作戦」による強奪と殺人の決算書、「最終解決」に関する報告、ヴァンゼー会議の議事録を含む証拠物件が多数、明白な形で掲載されていたからである。ニュルンベルク裁判でも証拠に使用された、ブダペストにおけるアイヒマンの同僚ヴィルヘルム・ヘットルがアイヒマンと交わした言葉もそこには記されていた。1944年末、ヘットルは殺害されたユダヤ人の正確な数を質問し、それに答えてアイヒマンは「あちこちの絶滅収容所ではおよそ400万人のユダヤ人が殺されたそうだ。他に200万が別の方法で死んだ。その大部分は、ロシア遠征中に保安警察の出動部隊に射殺された」と言った、という証言である。¹⁶⁾ さらにこの本の中には、アイヒマンについて5ページにわたって記した、「魔力なき大審問官アドルフ・アイヒマン」(Großinquisitor ohne Zauber: Adolf Eichmann)という表題の、独立した部分さえある。¹⁷⁾

デューラー・サークルにとって重要なことは、こうした「600万人という嘘」を正すことであった。そのために、正確な犠牲者数を知るとされるユダヤ人担当官アイヒマンに目をつけた。1957年4月以降、定期的に毎週土曜と日曜にサッセン家の居間で大規模な討論会が催され、「最終解決」についての議論が行われた。「サッセン・インタヴュー」というあまり適切でない呼び方をされるこの討論会で、彼らデューラー・サークルは『第三帝国とユダヤ人』をはじめとする関連の書籍を回し読みして討論し、アイヒマンの話聞いた。サッセンは当時珍しかったテープ・レコーダーを使ってこの討論を録音し、さらにその内容をタイプで記録させた。

しかし、アイヒマンはデューラー・サークルにとって実は適切なゲストではなかった。アイヒマンは彼らの意図を理解できなかったのか、あるいはあえて無視したのか、組織的な大量虐殺があったことを否定せず、数百万単位の犠牲者数を口にして恥じるのがなかったばかりか、「結局、何も後悔などしていない」¹⁸⁾と心境を語ったのだった。

15) Vgl. ebd., S.155.

16) Léon Poliakov, Josef Wulf: Das Dritte Reich und die Juden. Dokumente u. Aufsätze. München, New York, London, Paris (arani-Verlag) 1978, S.100.

17) Ebd., S.218-222.

18) アイヒマンがいわゆる「サッセン・インタヴュー」で述べたこの言葉はその後『ラ

ユダヤ人問題専門家にしてかつて誰知らぬ者ない大物のユダヤ人担当官だったアイヒマンは、援助機関のお蔭ですぐに家族も呼び寄せることができたし、最初は旧ナチ逃亡者救済組織CAPRIの技術者として、次には衛生施設エフェーヴ社社員として、あるいは養兎業者として、最後にはアルゼンチンのタイムラー・ベンツ社の社員として、そこそこの生活をしてはいたが、無名のドイツ人移民として生活をするのに飽き飽きしていたのである。「サッセン討論」の中でアイヒマンは今一度、人々の脚光を浴び、自分の世界観を披歴する機会に恵まれた。アルゼンチン時代に書き記していた手記「他人は話した。今こそ私が話そう」の中で、彼はこう記している。「今こそ私が匿名状態から抜け出し、自分を明かす時だ。氏名：アドルフ・オットー・アイヒマン、国籍：ドイツ、職業：SS上級大隊指導者（退役）」¹⁹⁾ アイヒマンの失策は結局、この討論会の誘いに乗ったことに起因する。親ナチのアルゼンチンで生活し、ペロン大統領の客ともなるうちに、アイヒマンは次第に用心深さを失ってしまったと思われる。こうした行動で人目につくことによって、イスラエルの諜報機関の目にとまることになったのだから。

アルゼンチンにおけるアイヒマンの心情を端的に示すものとして現在最も有名なのが、1957年の9月から10月に行われた集まりでの「一座の方々への短い結語」と呼ばれるアイヒマンのスピーチである。

・・・私が心から後悔し、サウルがパウロとなるが如く態度を一変させてみせるのは、あまりにも簡単だし、今日流行の見解に従って、簡単にやってみせることもできるだろう。同志サッセンよ、私にはそんなことはできない。そんな気にはなれないから、できないのだ。たとえば、われわれは何か間違ったことをした、などと言うことに、私の内なるものが抵抗を覚えるのだ。そうだと、虚心坦懐に言わねばならない。もしもわれわれが知るように、コールヘアが算定したところでは1030万いるユダヤ人の中の1030万のユダヤ人を殺したというのなら、私は満足してこう言うことができよう。よかろう、われわれは敵を殲滅した、と。ところが運命の悪巧みによってこの1030万のユダヤ人の大部分は生き残っているのだ。運命がこれを望んだのだ、と私は考える。私は運命と神の摂理に従わざるをえない。私はちっぽけな人間に過ぎず、それに反抗する必要もなければ、反抗もできず、そうしたいとも思わない。²⁰⁾

イフ』誌のタイトルを飾ることになった。Vgl. 'To sum it all up, I regret nothing.' In: *Life*, 5. 12. 1960, p.146.

19) Stangneth, S.266 から引用。

20) Irntrud Wojak: *Eichmanns Memoiren. Ein kritischer Essay.* Frankfurt am Main (Fischer)

こうした文書から明らかになるのは、アルゼンチンのアイヒマンが反ユダヤ主義世界観を持つ人間として振る舞っていたこと、そして彼が今一度人々の注目を集める重要人物として世間に復帰したいという虚栄心と名誉欲を持っていたことである。

4. 確信したナチか、それとも平凡な出世主義者か

1960年、アイヒマンがイスラエルによって捕獲されると、サッセンはこのいわゆる「サッセン・インタヴュー」のごく一部をアメリカの『ライフ』に、その後ドイツで『シュテルン』に売る。アイヒマンを使って今一度ドイツに国家社会主義を復活させようというデューラー・サークルの目論見は失敗に終わったが、「サッセン・インタヴュー」によって経済的利益が得られるかもしれないということに、サッセンは気づいたものと思われる。しかし、アイヒマンはこの筆記録が本物であることを徹底して否定し、自分のものとして認めた会話も「居酒屋談義」(Wirthausgespräch)に過ぎないと強弁した。アイヒマンの弁護士セルヴァティウスはこれを証拠として採用しようとするハウスナーに徹底抗戦し、法廷が証拠として採用することができたのは、アイヒマンが直筆で書き込んだわずかな部分だけとなった。しかも、サッセンが『ライフ』、『シュテルン』に売ったのはごく僅かな部分であり、アイヒマンにとって致命的な記述は裁判関係者も読むことができなかった。1979年になるまで一般人が「サッセン・インタヴュー」を閲覧することはできなかったのである。²¹⁾

「サッセン・インタヴュー」およびイスラエルに保存されているアイヒマンの回想録を研究したイルムトゥールド・ヴォヤクによれば、アイヒマンはアーレントが見たような単なる「道化」ではなく、その過剰な国家主義と行動の原動力としての反ユダヤ主義は決して過小評価するべきではない。²²⁾ では、エルサレムのアイヒマンは、死刑判決を逃れるため、害のない小役人の仮面をかぶることを決めたのだろうか。彼は「いかさま芝居をした」²³⁾ のであり、アーレントほどの慧眼の持ち主さえ欺いたのだろうか。

アルゼンチンにおけるアイヒマンの言葉が彼の真の感情を語ったものだとすれば、どうして彼はこうまでユダヤ人に憎悪を燃やしていたのか、その理由を推測するのは難しい。アーレントが指摘するように、アイヒマンには「ユ

2004, S.63 から引用。また Stangneth, S.391ff. も参照。

21) 「サッセン・インタヴュー」が発見された経緯については Wojak, S.48-66 を参照。

22) Vgl. Wojak, S.200.

23) Holocaust. „Eichmann zog im Jerusalem eine perfide Show ab“. In: Die Welt, 04.04. 2011.

ダヤ人を憎まない個人的理由」²⁴⁾ が充分にあったからである。オーストリアでヴァキューム石油会社に就職するにあたっては、親戚の「フリッツ叔父さん」に口をきいてもらっているが、この叔父はユダヤ人と姻戚関係にあった。なにより、ヴァキューム社の社長自身もユダヤ人であった。アイヒマンもその家族も、ユダヤ人のコネを使って職探しをすることに何の躊躇もしていない。²⁵⁾ とはいえ、オーストリアにおける反ユダヤ主義は長い伝統を持っており、アイヒマンはユダヤ人差別が日常的である環境で成長し、教育を受けた。しかも、プロテスタントであるアイヒマン家はリンツでは少数派であり、よそ者で、一家は反ユダヤ的思想によってのみ、この環境と同化していたのである。²⁶⁾ だからこそ、カルテンブルンナーに誘われた時にアイヒマンは特に深い考えもなくSSに入隊を決めたのだろう。

SDやRSHAにおけるアイヒマンの立場を見ると、まず目につくことは、彼が大学教育を受けていない異端者であったことである。シュターレッカー、オーレンドルフ、ジックスをはじめとして彼の同僚、上司の多くは、大学で主に法学を修めており、博士号を持つ者も多かった。ギリシャ、スロヴァキアでアイヒマンの右腕として働き、多くのユダヤ人を絶滅収容所に送ったヴィスリツェニーは神学を専攻していたことがあるが、アイヒマンは彼の教養を尊敬し、この男に因んで三番目の息子を命名してさえいる。アイヒマンは自分の学歴コンプレックスへの補償として、RSHAでの仕事で実績を上げようと熱意を燃やしたのではなかろうか。そしてこの組織の本質は反ユダヤ主義にあったから、出世のためにユダヤ人問題に取り組んだのではないだろうか。パレスチナにあるドイツ騎士団の入植地サローナの生まれであり、ヘブライ語とイディッシュ語を自由に操るユダヤ通であるという偽りの情報を意図的に流したのも、「ユダヤ人担当官」として箔をつけるための試みであっただろう。最終的には「ユダヤ人に関する事項を規定する国家弁務官(Reichskommissar)」になることがアイヒマンの最終的な夢だったのだから。²⁷⁾

1941年11月、アイヒマンは親衛隊上級大隊指導者(Obersturmbannführer、中佐に相当)に昇進し、結局これが彼の最終的な位階となる。連隊指導者(Standartenführer、大佐に相当)に昇進するために前線で戦うことすら願い出るが、結局これ以上の昇進はできなかった。捕獲されてエルサレムでレス警部の尋問を受けている時、アイヒマンは、「何の躊躇もなくこのユダヤ人に向かって、自分がSSでもっと高い地位に上れなかった理由と、またそれ

24) Arendt: Eichmann in Jerusalem, p.30. 邦訳23頁。

25) Vgl. Cesarani, p.23.

26) Vgl. ebd., p.33.

27) Vgl. Stangneth, S.34.

は自分が悪かったからではないということをくりかえし延々と説明してやまなかった。」²⁸⁾とアーレントは書いている。

悪名高い「一座の方々への短い結語」にしても、このスピーチは一種のパフォーマンスではなかったかと思われる。アイヒマンは、サッセンたちと本を出版する企画をしており、自分のスピーチが「結語」として本にも載り、また会合の最後を飾る記念碑的なものになると勘違いしていた。スピーチの後、一座の白けた雰囲気の中でようやく、自分が道化を演じてしまったことを認識したようである。²⁹⁾

「アイヒマンは確かに「確信した反ユダヤ主義者」だったことだろう。しかしその動機は、何らかの世界観やユダヤ人への激しい憎悪に基づくものというよりは、最初は環境からの影響によるもので、のちには出世のための道具だったのではないだろうか。そこに見られるのは悪魔的な倒錯というよりは、至るところで観察可能な、人間につきものの平凡な欲である。

5. 「根源悪」から「悪の陳腐さ」へ

アーレントがアイヒマンの悪に与えた「陳腐」という表現は誤りだったのだろうか。それとも、実際アイヒマンは単なる出世主義者でしかなく、この男を実際に見た時間はそれほど長くはなかったとしても、アーレントの慧眼はアイヒマンの本質を見抜いていたのだろうか。³⁰⁾

全体主義の犯罪を理解しようとする彼女の取り組みは、ドイツ敗戦の直後から始まっている。1946年8月、師であるヤスパースから『罪責論』を受け取ったアーレントは、ナチ犯罪を刑事犯罪とする師の定義に次のように疑義を挟んでいる。

これ（ナチの犯罪）はもはや法の枠にはおさまらない犯罪で、その途方もない恐ろしさはまさにそこにあるのではないのでしょうか。この犯罪には、それに見合う重さの刑罰がない。（中略）つまりこの罪は、刑事上のすべての罪とはちがって、いっさいの法秩序を超え、それを打ち砕いてしまう。³¹⁾

28) Arendt: Eichmann in Jerusalem, p.49. 邦訳38頁。

29) Vgl. Stangneth, S.390-396.

30) セアラニによれば、アーレントが実際に裁判を見たのは実質4日間であり、その間アイヒマンは自分の弁護人による単純な好意的質問に答えていた。話がヴァンゼー会議にさしかかったところでアーレントはエルサレムを離れなくてはならず、その後の法廷におけるアイヒマンの弁舌を聞いてはいなかった。Cesarani, p.346を参照。

31) Hannah Arendt Karl Jaspers Briefwechsel 1926-1969. Herausgegeben von Lotte Köhler

これに対するヤスパースの返事は次のようなものである。

ナチのしたことは「犯罪」として把握することはできない——あなたのこの見方は私には危ないように思えるのです。なぜなら、あらゆる刑法上の罪を上回るような罪というのは、どうしても「偉大さ」—悪魔的な偉大さ—の相貌を得てしまう。これはヒットラーにおける「デモーニッシュなもの」を喋々するたぐいの議論と同様、ナチに対する私の感情からきわめてかけ離れている。思うにわれわれは、ことは実際にそうであったのだから、ことをその完全な陳腐さにおいて (in ihrer ganzen Banalität), そのまったく味気ない無価値さにおいて、とらえなくてはいけない—バクテリアはあまたの民族を破滅させるほどの伝染病を惹きおこすことがあるにしても、それでもやはりたんなるバクテリアにすぎないのです。³²⁾

アーレントはこれに対し、自分のこれまでの表現では「悪魔的な偉大さ」に近づく危険があるという師の指摘は納得して受け入れたものの、「それでもやはり、老いた叔母を殺しに行く男と、直接の功利計算抜きで屍体製造工場をつくる者たちとは (中略) 違いがありはしないでしょうか」³³⁾と疑問を呈している。その後1951年3月、アーレントは再び「悪」についての論議に立ち戻り、ヤスパースに宛ててこう書いている。

悪はこれまで予想されていたよりももっと根源的 (radikaler) だということのみずから立証しました。表面的に言っても、現代の犯罪は十戒では予想されていないのです。言い換えれば、西洋の伝統は、人間がなしうる最大の悪も、利己心という悪徳から生まれると見る先入観にとらわれています。でもその一方で私たちは、最大の悪 (das Böseste) もしくは根源悪 (das radikal Böse) は、そういう人間的に理解可能な罪ぶかい動機とはもはやまるっきり関係がないということを知っています。³⁴⁾

「根源悪」という言葉を最初に使ったのはカントである。『単なる理性の限界内の宗教』においてカントは、「人間は生来悪である」と述べた。その理由は、人間は道徳法則を意識しており、つねにそれを格率として採用すべき

und Hans Saner. München (Piper) 1987, S.90. 邦訳：(大島かおり訳)：『アーレント＝ヤスパース往復書簡 1926-1969』, (みすず書房), 2004年, 第1巻 62頁。

32) Ebd., S.98f. 邦訳71頁。

33) Ebd., S.106. 邦訳79頁。

34) Ebd., S.202. 邦訳192頁。訳文を一部変更。

であるにもかかわらず、性癖 (Hang) の赴くところによって、道徳法則以外のもの、例えば自然的傾向性に従って行動することがあるからである。そしてこうした性癖は人間性のうちに根を張っている (gewurzelt sein) のだから、これを人間本性のうちなる生得的な根源悪 (ein radikales, angeborenes Böse) と呼ぶことができる、と言った。³⁵⁾ カントにおける「根源悪」は、「利己心という悪徳から生まれる」ものではありえても、経済上の利益に反しても「屍体製造工場をつくる」ような謎めいた悪のことではない。

ヤスパースへの手紙で「根源悪」に触れた年1951年に発表された『全体主義の起源』においてアーレントは「われわれが根源悪 (das radikale Böse) というものを理解することができないのは古代以来のわれわれの哲学の伝統のせいである」として、現代における悪は伝統的な哲学では理解できないと述べている。彼女にとってカントは「一つの新しい言葉を作り出したことによって悪の存在を少なくとも予感した」哲学者ではあるものの、「倒錯した悪意という概念を持ち出してたちまち動機によって理解し得るものに合理化してしまった」³⁶⁾ という点で、現代の悪を論じる際の助けにはならない。ナチズムとボルシェニズム (スターリニズム) という二つの全体主義体制の中で、悪や人間の苦しみは従来の尺度では測れないものに変質してしまったからである。

『全体主義の起源』でアーレントが言ったのは、われわれは「根源悪」を理解することはできず、ゆえに、あらゆる尺度をおちこわしてしまうような悪である強制収容所を理解しようと努力しても、よりどころとするものはない、ということであった。アイヒマン裁判が始まることを知った時アーレントは、終戦直後から自分が考え続けてきたこの「根源悪」について理解できるかもしれないと考えた。そしてそれを「陳腐さ」という「まったく味気ない無価値さ」の中で理解したのである。

政治学者としてのアーレントにとって重要な関心は、「罰することも赦すこともできない」根源悪を、現実の法廷がいかに裁くか、ということであった。そしてイスラエル国家による裁判に疑義を呈していたものの、ナチ犯罪を刑事犯罪として裁くこの裁判の正当性を最終的には認めることにした。だからこそ『エルサレムのアイヒマン』は、アイヒマンが絞首刑に処されなければならない理由を述べる架空の判決で終わっているのである。

35) Kants gesammelte Schriften : nach den Bänden I-XIII der Akademie-Textausgabe, Bd. VI, S.32.

36) Hannah Arendt: Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft. München (Piper) 2000, S.941f. 邦訳：(大久保和郎・大島かおり訳)『全体主義の起源』第3巻、(みすず書房)、1996年、266頁。

結 語

自分の使った「陳腐」という表現がこれほどまでに人々の反感を呼び起こすとは、恐らくアレントは予想していなかったと思われる。『エルサレムのアイヒマン』によって容赦ないバッシングに晒された1963年9月、アレントはあるジャーナリストの質問に答えて、「悪の陳腐さ」を読んだ人たちがどうして「彼らの苦しみは陳腐だ」という結論に飛躍するのかわからない、「陳腐」(banal)と「平凡な」(commonplace)の間には大きな違いがあるのだと解説し、そして自分は大衆の読者(mass audience)に向けて書いたことがなかったの、何が起きたかわからなかったのだ、と述べている。³⁷⁾ 実際、「陳腐」という言葉は『エルサレムのアイヒマン』の本文においては最後に一度だけ、説明もなく唐突に出てくるだけなのだから、アレントにおける「根源悪」の捉え方や、ヤスパースとのやり取りの経緯など何も知らないmass audienceが誤解するのも無理からぬことである。

「陳腐」に籠められた彼女の本意は、ナチ犯罪は「人間の判断の可能性を絶するものであり、われわれの法的な制度の枠組みを吹き飛ばすものである」という、かつての自分も抱いていた考えを否定することにあった。次の言葉がその証左となるであろう。

さらに言えば、「悪の陳腐さ」という、今問題になっているフレーズは、「根源悪(radical evil)」(カント)と、もっと一般的に言えば、偉大なる悪には何か悪魔的(demonic)な、荘厳(grandiose)なものがあるとか、さらには悪の力には何か良きものを生み出す力があるとかいった、広く行きわたった意見との対比の中で使われているのです。³⁸⁾

アレント以降の研究によって、新しいアイヒマン像が次第に明らかになってきた。「サッセン・インタヴュー」や、アイヒマンがアルゼンチンやエルサレムの獄中で記した手記の中の、現在は閲覧禁止となっている部分が閲覧可能になれば、さらに別の事実も明らかになるかもしれない。アイヒマンはたしかにアレントが考えたほど平凡かつ無害な小役人ではなかったが、彼の行った悪に、人間の理解を超えるような次元の動機があったとは、

37) Hannah Arendt: Answers to Questions Submitted by Samuel Grafton. In: The Jewish Writings. Edited by Jerome Kohn and Ron H. Feldman. New York (Schocken) 2007, pp.478. 邦訳: (齋藤純一・山田正行・金慧・矢野久美子・大島かおり訳)『ハンナ・アレント アイヒマン論争 ユダヤ論集2』, (みすず書房), 2013年335頁。訳文を一部変更。

38) Ebd., S.479. 邦訳335頁。訳文を一部変更。

現在のところは思えない。

アーレントの功績は、20世紀の全体主義体制内での犯罪においては、個人の意図とそれがもたらす結果の大きさの間に大きな乖離があることを明らかにした点にある。今日の社会では、平凡な小悪人が同時に大量殺人者となりうる。屍体製造工場を生み出した全体主義的な解決法は、スターリニズムとナチズムという二つの全体主義体制の崩壊後も充分生き残るかもしれない、とアーレントは警告した。³⁹⁾ ナチの時代におけるよりも格段に技術が進歩し、比べ物にならないほど情報化が進んだ今日の社会において、卑小な動機でなされる悪が途方もない結果をもたらす危険は、20世紀とは比較にならないほど大きいことを、われわれは肝に銘じておかななくてはならない。

39) Arendt: Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft, S.942f. 邦訳267頁。

Eichmann und die Banalität des Bösen

Eri KATSUKI

Adolf Eichmann, einer der bekanntesten Täter des Holocaust, der seit 1950 in Argentinien untertaucht war, wurde im Mai 1960 vom israelischen Geheimdienst entführt und saß im folgenden Jahr vor dem Jerusalemer Gericht. Die Philosophin Hannah Arendt hat als Reporterin Eichmann hinter dem Panzerglas im Gericht beobachtet und die Reportage „Eichmann in Jerusalem“ geschrieben. Doch der Untertitel ihres Berichtes, die „Banalität des Bösen“ hat eine wilde Kontroverse ausgelöst. Man hat ihre These als ein Urteil interpretiert, dass in jedem von uns ein Eichmann stecke oder es liege am modernen Leben, dass wir alle bloße Rädchen in irgendeiner Maschinerie geworden sind. Arendt wurde vorgeworfen, dass sie versuche, das Verbrechen Eichmanns mit diesem Adjektiv „banal“ zu unterschätzen.

Das Wort, die „Banalität des Bösen“ hat seine Quelle in einem Brief von Jaspers an Arendt. Darin weist Jaspers auf das Gefahr hin, in den Nazi-Verbrechern Monstren zu sehen, und er sagt, dass man sie in ihrer ganzen Banalität beobachten muss. Arendt hat ihre Meinung geändert und stimmte ihm zu. Danach nennt sie in „Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft“ das Verbrechen des Totalitarismus, das man weder bestrafen noch verzeihen kann, „das radikal Böse“. Im Jahr 1961, als Arendt nach Jerusalem flog, hatte sie sicher erwartet, dort einem „radikal Bösen“ gegenüberzustehen. Für viele Menschen, die sich Eichmann als ein Monstrum oder den Inbegriff des Bösen vorgestellt haben, war der ältere, armselige Mann eine Enttäuschung. Auch Arendt hat ihn einen „Hanswurst“ genannt. Im Prozess hatte Eichmann seine juristische Schuld an der Massenvernichtung der Juden mit der Rechtfertigung streng geleugnet, dass er nur das durchgeführt habe, was ihm von den Vorgesetzten befohlen wurde.

Eichmann war 1950 mit Hilfe von katholischen Geistlichen nach Argentinien geflohen. Dort gab es ein Netzwerk von Nationalsozialisten, den Dürer-Kreis. Die Männer dort träumten, in Deutschland den Nationalsozialismus wiederzubeleben, und näherten sich Eichmann. Ab 1957 veranstalteten sie im Wohnzimmer von Willem Sassen, einem ehemaligen SS-Kriegsberichterstatter, regelmäßige Treffen und Sassen ließ die Gespräche auf Tonband aufnehmen und transkribieren. Wenn man die Aufzeichnung des Treffens, das „Sassen-Transkript“ studiert, bekommt man den Eindruck, dass Eichmann kein einfacher Schreibtischtäter, sondern ein sehr überzeugter, aktiver Antisemit und Mittäter war. Er betont darin sogar seine Initiative bei der Endlösung. Das Fazit der Philosophin Bettina Stangneth, die sowohl das „Sassen-Transkript“ als auch die

Aufzeichnungen, die Eichmann in der Zelle in Jerusalem schrieb, genau studiert hat, lautet, dass Eichmann in Jerusalem „eine perfide Show abgezogen“ hatte.

Hat Arendt Eichmanns Schauspiel nicht durchschauen können und über ihn falsch geurteilt? Man darf dabei nicht vergessen, dass das Wort „banal“ für Arendt (und Jaspers) nicht eine die Schuld erleichternde Formlierung ist. Der Verbrecher Eichmann war nur ein gewöhnlicher Spießier ohne irgendeine geheimnisvolle Aura. Was bei Eichmann auffällig ist, ist sein Ehrgeiz, unbedingt Karriere zu machen. Er wollte in Argentinien nicht ruhig in der Anonymität leben. Daher hatte er sich das eigene Grab geschaufelt. Auch sein Antisemitismus basierte nicht auf einem weltanschaulichen Hintergrund, sondern war eher ein Mittel, im RSHA anerkannt zu werden.

Auch wenn Eichmann kein einfacher „Hanswurst“, sondern sehr schlau und umtriebig war, kann man seine Tat als „banal“ bezeichnen. Wir können jetzt einsehen, dass ein überzeugter Nazi auch banal sein und ein banaler Verbrecher eine extrem böse Tat begehen kann. In der modernen hochtechnologischen Welt, in der für einen gewöhnlichen Menschen ein Massenmord möglich wird, ist die „Banalität des Bösen“ gefährlicher als im 20. Jahrhundert.